

連結財務諸表

Jimoto Holdings

当社の銀行法第52条の28第1項の規定により作成した書面については、会社法第396条第1項による、EY新日本有限責任監査法人の監査を受けています。また、当社の連結貸借対照表、連結損益計算書、連結包括利益計算書、連結株主資本等変動計算書、連結キャッシュ・フロー計算書は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、EY新日本有限責任監査法人の監査証明を受けています。

連結貸借対照表

(単位：百万円)

	2018年3月期 (2018年3月31日)	2019年3月期 (2019年3月31日)
資産の部		
現金預け金	152,054	162,496
買入金銭債権	952	985
商品有価証券	2	2
有価証券	590,443	503,697
貸出金	1,722,003	1,762,749
外国為替	399	276
リース債権及びリース投資資産	11,283	11,782
その他資産	21,293	32,239
有形固定資産	25,633	24,424
建物	9,459	8,889
土地	14,183	13,876
建設仮勘定	—	9
その他の有形固定資産	1,991	1,648
無形固定資産	2,288	1,665
ソフトウェア	1,910	1,290
のれん	145	96
その他の無形固定資産	233	278
退職給付に係る資産	2,176	2,704
繰延税金資産	4,716	3,955
支払承諾見返	6,141	6,526
貸倒引当金	△ 11,594	△ 10,368
資産の部合計	2,527,794	2,503,137
負債の部		
預金	2,158,475	2,163,781
譲渡性預金	174,761	153,033
コールマネー及び売渡手形	50,000	43,500
借入金	11,104	9,210
外国為替	0	14
その他負債	7,852	8,095
賞与引当金	329	335
退職給付に係る負債	80	83
睡眠預金払戻損失引当金	335	319
偶発損失引当金	52	52
繰延税金負債	1,498	861
再評価に係る繰延税金負債	1,636	1,589
支払承諾	6,141	6,526
負債の部合計	2,412,267	2,387,404
純資産の部		
資本金	17,000	17,000
資本剰余金	67,138	67,138
利益剰余金	27,362	27,938
自己株式	△ 34	△ 29
株主資本合計	111,465	112,047
その他有価証券評価差額金	935	578
土地再評価差額金	3,572	3,464
退職給付に係る調整累計額	△ 834	△ 717
その他の包括利益累計額合計	3,673	3,325
非支配株主持分	387	360
純資産の部合計	115,526	115,732
負債及び純資産の部合計	2,527,794	2,503,137

連結損益計算書

(単位：百万円)

	2018年3月期 (2017年4月1日から 2018年3月31日まで)	2019年3月期 (2018年4月1日から 2019年3月31日まで)
経常収益		
資金運用収益	28,682	26,607
貸出金利息	21,998	21,689
有価証券利息配当金	6,484	4,719
コールローン利息及び買入手形利息	1	0
預け金利息	115	120
その他の受入利息	82	78
役員取引等収益	5,607	5,735
その他業務収益	260	1,701
その他経常収益	8,116	8,805
償却債権取立益	92	43
その他の経常収益	8,024	8,762
経常費用		
資金調達費用	899	657
預金利息	766	522
譲渡性預金利息	32	55
コールマネー利息及び売渡手形利息	△ 34	△ 29
借入金利息	104	74
その他の支払利息	30	33
役員取引等費用	3,454	3,488
その他業務費用	1,062	1,513
営業経費	27,266	26,062
その他経常費用	6,267	8,536
貸倒引当金繰入額	6	18
その他の経常費用	6,260	8,517
経常利益	3,717	2,592
特別利益	71	113
固定資産処分益	71	113
特別損失	211	382
固定資産処分損	36	96
減損損失	175	285
税金等調整前当期純利益	3,577	2,323
法人税、住民税及び事業税	272	426
法人税等調整額	277	187
法人税等合計	550	614
当期純利益	3,027	1,709
非支配株主に帰属する当期純利益	8	78
親会社株主に帰属する当期純利益	3,018	1,630

連結包括利益計算書

(単位：百万円)

	2018年3月期 (2017年4月1日から 2018年3月31日まで)	2019年3月期 (2018年4月1日から 2019年3月31日まで)
当期純利益	3,027	1,709
その他の包括利益	△ 1,899	△ 331
その他有価証券評価差額金	△ 2,380	△ 449
退職給付に係る調整額	480	117
包括利益	1,127	1,377
(内訳)		
親会社株主に係る包括利益	1,119	1,386
非支配株主に係る包括利益	7	△ 9

連結株主資本等変動計算書

2018年3月期 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)

(単位: 百万円)

	株主資本					株主資本合計
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式		
当期首残高	17,000	67,138	25,493	△ 34		109,596
当期変動額						
剰余金の配当			△ 1,190			△ 1,190
親会社株主に帰属する当期純利益			3,018			3,018
自己株式の取得				△ 0		△ 0
自己株式の処分				0		0
土地再評価差額金の取崩			40			40
株主資本以外の項目の当期変動額 (純額)						
当期変動額合計	—	—	1,869	0		1,869
当期末残高	17,000	67,138	27,362	△ 34		111,465

	その他の包括利益累計額				非支配株主持分	純資産合計
	その他有価証券 評価差額金	土地再評価 差額金	退職給付に係る 調整累計額	その他の包括 利益累計額合計		
当期首残高	3,315	3,613	△ 1,315	5,612	404	115,614
当期変動額						
剰余金の配当						△ 1,190
親会社株主に帰属する当期純利益						3,018
自己株式の取得						△ 0
自己株式の処分						0
土地再評価差額金の取崩						40
株主資本以外の項目の当期変動額 (純額)	△ 2,379	△ 40	480	△ 1,939	△ 17	△ 1,956
当期変動額合計	△ 2,379	△ 40	480	△ 1,939	△ 17	△ 87
当期末残高	935	3,572	△ 834	3,673	387	115,526

2019年3月期 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

(単位: 百万円)

	株主資本					株主資本合計
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式		
当期首残高	17,000	67,138	27,362	△ 34		111,465
当期変動額						
剰余金の配当			△ 1,162			△ 1,162
親会社株主に帰属する当期純利益			1,630			1,630
自己株式の取得				△ 0		△ 0
自己株式の処分		△ 0		5		5
土地再評価差額金の取崩			108			108
株主資本以外の項目の当期変動額 (純額)						
当期変動額合計	—	△ 0	576	5		581
当期末残高	17,000	67,138	27,938	△ 29		112,047

	その他の包括利益累計額				非支配株主持分	純資産合計
	その他有価証券 評価差額金	土地再評価 差額金	退職給付に係る 調整累計額	その他の包括 利益累計額合計		
当期首残高	935	3,572	△ 834	3,673	387	115,526
当期変動額						
剰余金の配当						△ 1,162
親会社株主に帰属する当期純利益						1,630
自己株式の取得						△ 0
自己株式の処分						5
土地再評価差額金の取崩						108
株主資本以外の項目の当期変動額 (純額)	△ 356	△ 108	117	△ 347	△ 27	△ 375
当期変動額合計	△ 356	△ 108	117	△ 347	△ 27	206
当期末残高	578	3,464	△ 717	3,325	360	115,732

連結キャッシュ・フロー計算書

(単位：百万円)

	2018年3月期 (2017年4月1日から 2018年3月31日まで)	2019年3月期 (2018年4月1日から 2019年3月31日まで)
営業活動によるキャッシュ・フロー		
税金等調整前当期純利益	3,577	2,323
減価償却費	2,184	1,936
減損損失	175	285
のれん償却額	168	48
持分法による投資損益(△は益)	△ 14	△ 21
貸倒引当金の増減(△)	△ 1,045	△ 1,226
賞与引当金の増減額(△は減少)	22	6
退職給付に係る資産の増減額(△は増加)	△ 1,218	△ 528
退職給付に係る負債の増減額(△は減少)	△ 14	3
利息返還損失引当金の増減額(△は減少)	△ 3	—
睡眠預金払戻損失引当金の増減(△)	△ 35	△ 16
偶発損失引当金の増減額(△は減少)	△ 12	△ 0
資金運用収益	△ 28,682	△ 26,607
資金調達費用	899	657
有価証券関係損益(△)	△ 803	△ 672
為替差損益(△は益)	△ 0	△ 0
固定資産処分損益(△は益)	△ 35	△ 16
貸出金の純増(△)減	△ 23,950	△ 40,745
預金の純増減(△)	△ 54,002	5,306
譲渡性預金の純増減(△)	33,692	△ 21,727
借入金(劣後特約付借入金を除く)の純増減(△)	△ 3,615	△ 1,893
預け金(日銀預け金を除く)の純増(△)減	△ 156	△ 789
コールローン等の純増(△)減	△ 39	△ 33
コールマネー等の純増減(△)	—	△ 6,500
外国為替(資産)の純増(△)減	△ 31	122
外国為替(負債)の純増減(△)	△ 0	14
リース債権及びリース投資資産の純増(△)減	△ 535	△ 498
資金運用による収入	29,493	27,504
資金調達による支出	△ 1,188	△ 877
その他	△ 17,988	△ 9,509
小計	△ 63,160	△ 73,457
法人税等の還付額	172	235
法人税等の支払額	△ 597	△ 488
営業活動によるキャッシュ・フロー	△ 63,585	△ 73,709
投資活動によるキャッシュ・フロー		
有価証券の取得による支出	△ 116,131	△ 117,586
有価証券の売却による収入	64,234	111,503
有価証券の償還による収入	86,287	91,049
有形固定資産の取得による支出	△ 1,622	△ 430
有形固定資産の売却による収入	211	230
無形固定資産の取得による支出	△ 340	△ 221
投資活動によるキャッシュ・フロー	32,639	84,546
財務活動によるキャッシュ・フロー		
劣後特約付社債及び新株予約権付社債の償還による支出	△ 8,000	—
リース債務の返済による支出	△ 3	△ 3
自己株式の取得による支出	△ 0	△ 0
自己株式の売却による収入	—	0
配当金の支払額	△ 1,190	△ 1,162
非支配株主への配当金の支払額	△ 25	△ 18
財務活動によるキャッシュ・フロー	△ 9,219	△ 1,185
現金及び現金同等物に係る換算差額	0	0
現金及び現金同等物の増減額(△は減少)	△ 40,165	9,651
現金及び現金同等物の期首残高	190,935	150,770
現金及び現金同等物の期末残高	150,770	160,421

連結財務諸表

Jimoto Holdings

注記事項 (2019年3月期)

連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項

1. 連結の範囲に関する事項
 - (1) 連結子会社 6社
会社名 ・株式会社きらやか銀行
・株式会社仙台銀行
・きらやかカード株式会社
・きらやかリース株式会社
・きらやかコンサルティング&パートナーズ株式会社
・山形ビジネスサービス株式会社
 - (2) 非連結子会社 0社
2. 持分法の適用に関する事項
 - (1) 持分法適用の非連結子会社 0社
 - (2) 持分法適用の関連会社 1社
会社名 ・株式会社富士通山形インフォテック
 - (3) 持分法非適用の非連結子会社 0社
 - (4) 持分法非適用の関連会社 0社
3. 連結子会社の事業年度等に関する事項
すべての連結子会社の決算日は連結決算日(3月末日)と一致しております。
4. 会計方針に関する事項
 - (1) 商品有価証券の評価基準及び評価方法
商品有価証券の評価は、時価法(売却原価は移動平均法により算定)により行っております。
 - (2) 有価証券の評価基準及び評価方法
 - イ) 有価証券の評価は、満期保有目的の債券については移動平均法による償却原価法(定額法)、その他の有価証券については原則として連結決算日の市場価格等に基づく時価法(売却原価は移動平均法により算定)、ただし時価を把握することが極めて困難と認められるものについては移動平均法による原価法により行っております。
なお、その他の有価証券の評価差額については、全部純資産直入法により処理しております。
 - ロ) 有価証券運用を主目的とする単独運用の金銭の信託において信託財産として運用されている有価証券の評価は、時価法により行っております。
 - (3) デリバティブ取引の評価基準及び評価方法
デリバティブ取引の評価は、時価法により行っております。
 - (4) 固定資産の減価償却の方法
 - ① 有形固定資産(リース資産を除く)
当社及び連結子会社の有形固定資産は、定額法を採用しております。
また、主な耐用年数は次のとおりであります。
建物 2年～50年
その他 2年～20年
 - ② 無形固定資産(リース資産を除く)
無形固定資産は、定額法により償却しております。なお、自社利用のソフトウェアについては、当社及び連結子会社で定める利用可能期間(主として5年)に基づいて償却しております。
 - ③ リース資産
所有権移転外ファイナンス・リース取引に係る「有形固定資産」(及び「無形固定資産」)中のリース資産は、リース期間を耐用年数とした定額法により償却しております。なお、残存価額については、リース契約上に残価保証の取決めがあるものは当該残価保証額とし、それ以外のものは零としております。
 - (5) 貸倒引当金の計上基準
銀行業を営む連結子会社の貸倒引当金は、予め定めている償却・引当基準に則り、次のとおり計上しております。
破産、特別清算等法的に経営破綻の事実が発生している債務者(以下、「破綻先」という。)に係る債権及びそれと同等の状況にある債務者(以下、「実質破綻先」という。)に係る債権については、以下のなお書に記載されている直接減額後の帳簿価額から、担保の処分可能見込額及び保証による回収可能見込額を控除し、その残額を計上しております。また、現在は経営破綻の状況にないが、今後経営破綻に陥る可能性が大きいと認められる債務者(以下、「破綻懸念先」という。)に係る債権については、債権額から、担保の処分可能見込額及び保証による回収可能見込額を控除し、その残額のうち、債務者の支払能力を総合的に判断し必要と認められる額を計上しております。
上記以外の債権については、過去の一定期間における貸倒実績率から算出した貸倒実績率等に基づき計上しております。
すべての債権は、資産の自己査定基準に基づき、営業関連部署が資産査定を実施し、当該部署から独立した資産監査部署が査定結果を監査しております。
なお、破綻先及び実質破綻先に対する担保・保証付債権等については、債権額から担保の評価額及び保証による回収が可能と認められる額を控除した残額を取立不能見込額として債権額から直接減額しており、その金額は3,801百万円であります。
その他の連結子会社の貸倒引当金は、一般債権については過去の貸倒実績率等を勘案して必要と認められた額を、貸倒懸念債権等特定の債権については、個別に回収可能性を勘案し、回収不能見込額をそれぞれ計上しております。
 - (6) 賞与引当金の計上基準
賞与引当金は、銀行業を営む一部の連結子会社において、従業員への賞与の支払いに備えるため、従業員に対する賞与の支給見込額のうち、当連結会計年度に帰属する額を計上しております。
 - (7) 役員賞与引当金の計上基準
役員賞与引当金は、一部の連結子会社において、役員への賞与の支払いに備えるため、役員に対する賞与の支給見込額のうち、当連結会計年度に帰属する額を計上しております。
なお、当連結会計年度は、支給見込額が零であるため計上していません。
 - (8) 睡眠預金払戻損失引当金の計上基準
睡眠預金払戻損失引当金は、負債計上を中止した預金について、預金者からの払戻請求に備えるため、将来の払戻請求に応じて発生する損失を見積り必要と認める額を計上しております。
 - (9) 偶発損失引当金の計上基準
偶発損失引当金は、銀行業を営む一部の連結子会社において、信用保証協会の責任共有制度に係る信用保証協会への負担金の支払いに備えるため、将来発生する可能性のある負担金支払見積額を計上しております。

- (10) 退職給付に係る会計処理の方法
退職給付債務の算定にあたり、退職給付見込額を当連結会計年度末までの期間に帰属させる方法については給付算定式基準によっております。また、過去勤務費用及び数理計算上の差異の費用処理方法は次のとおりであります。
過去勤務費用：その発生時の従業員の平均残存勤務期間内の一定の年数(10年又は11年)による定額法により費用処理
数理計算上の差異：各連結会計年度の発生時の従業員の平均残存勤務期間内の一定の年数(10年又は11年)による定額法により按分した額を、それぞれ発生翌連結会計年度から費用処理
なお、一部の連結子会社は、退職給付に係る負債及び退職給付費用の計算に、退職給付に係る期末自己都合要支給額を退職給付債務とする方法を用いた簡便法を適用しております。
- (11) 受取保証料(役務取引等収益)の計上基準
クレジットカードを営む連結子会社における受取保証料(役務取引等収益)については、当連結会計年度末における被保証債務残高が全額期限前弁済されると仮定した場合に返戻を要する保証料額(契約に基づく金額)を、受取保証料の総額から除いた額を収益として計上する方法を採用しております。
- (12) 収益及び費用の計上基準
ファイナンス・リース取引に係る収益及び費用の計上基準については、リース料受取時に売上高と売上原価を計上する方法によっております。
- (13) 外貨建の資産及び負債の本邦通貨への換算基準
銀行業を営む連結子会社の外貨建資産・負債は、連結決算日の為替相場による円換算額を付しております。
その他の連結子会社の外貨建資産・負債はありません。
- (14) 重要なヘッジ会計の方法
 - イ) 金利リスク・ヘッジ
銀行業を営む一部の連結子会社の金融資産・負債から生じる金利リスクに対するヘッジ会計の方法は、「銀行業における金融商品会計基準適用に関する会計上及び監査上の取扱い」(日本公認会計士協会業種別監査委員会報告第24号 2002年2月13日。以下、「業種別監査委員会報告第24号」という。)に規定する繰延ヘッジによっております。ヘッジ有効性評価の方法については、相場変動を相殺するヘッジについて、ヘッジ対象となる預金・貸出金等とヘッジ手段である金利スワップ取引等を一定の(残存)期間毎にグルーピングのうえ特定し評価しております。また、キャッシュ・フローを固定するヘッジについては、ヘッジ対象とヘッジ手段の金利変動要素の相関関係の検証により有効性の評価をしております。
また、銀行業を営む一部の連結子会社の金融資産・負債から生じる金利リスクに対するヘッジ会計の方法は、一部の資産・負債に金利スワップ取引の特例処理を行っております。
 - ロ) 為替変動リスク・ヘッジ
銀行業を営む連結子会社の外貨建金融資産・負債から生じる為替変動リスクに対するヘッジ会計の方法は、「銀行業における外貨建取引等の会計処理に関する会計上及び監査上の取扱い」(日本公認会計士協会業種別監査委員会報告第25号 2002年7月29日。以下、「業種別監査委員会報告第25号」という。)に規定する繰延ヘッジによっております。ヘッジ有効性評価の方法については、外貨建金銭債権債務等の為替変動リスクを減殺する目的で行う通貨スワップ取引及び為替スワップ取引等をヘッジ手段とし、ヘッジ対象である外貨建金銭債権債務等に見合うヘッジ手段の外貨ポジション相当額が存在することを確認することによりヘッジの有効性を評価しております。
その他の連結子会社は、ヘッジ会計を適用していません。
- (15) のれんの償却方法及び償却期間
5年間の均等償却を行っております。
- (16) 連結キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲
連結キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲は、連結貸借対照表上の「現金預け金」のうち現金及び日本銀行への預け金であります。
- (17) 消費税等の会計処理
当社及び国内連結子会社の消費税及び地方消費税の会計処理は、税抜方式によっております。

未適用の会計基準等

- ・「収益認識に関する会計基準」(企業会計基準第29号 2018年3月30日)
 - ・「収益認識に関する会計基準の適用指針」(企業会計基準適用指針第30号 2018年3月30日)
- (1) 概要
収益認識に関する包括的な会計基準であります。収益は、次の5つのステップを適用し認識されます。
ステップ1：顧客との契約を識別する。
ステップ2：契約における履行義務を識別する。
ステップ3：取引価格を算定する。
ステップ4：契約における履行義務に取引価格を配分する。
ステップ5：履行義務を充足した時に又は充足するにつれて収益を認識する。
 - (2) 適用予定日
2022年3月期の期首より適用予定であります。
 - (3) 当該会計基準等の適用による影響
当該会計基準等の適用による影響は、評価中であります。

追加情報

- (株式給付信託(BBT))
- 当社は、当社及び当社子会社である株式会社きらやか銀行並びに株式会社仙台銀行(以下、「当社グループ」という。)の社外取締役を除く取締役(以下、「対象役員」という。)に対して業績連動型の株式報酬制度「株式給付信託(BBT)」を導入しております。
1. 取引の概要
当社が拠出する金銭を原資として、本制度に基づき設定される信託を通じて当社株式を取得します。取得した当社株式は、対象役員に対して、当社グループが定める「役員株式給付規程」に従い受給要件を満たした者に当社株式等を給付します。
 2. 信託に残存する自社の株式
信託に残存する当社株式を、信託における帳簿価額(付随費用の金額を除く。)により、純資産の部に自己株式として計上しております。
当該自己株式の帳簿価額及び株式数は当連結会計年度末27百万円、187千株であります。

連結貸借対照表関係

1. 非連結子会社及び関連会社の株式又は出資金の総額	132百万円
2. 貸出金のうち破綻先債権額及び延滞債権額は次のとおりであります。	
破綻先債権額	519百万円
延滞債権額	31,526百万円
なお、破綻先債権とは、元本又は利息の支払の遅延が相当期間継続していることその他の事由により元本又は利息の取立て又は弁済の見込みがないものとして未収利息を計上しなかった貸出金（貸倒償却を行った部分を除く。以下、「未収利息不計上貸出金」という。）のうち、法人税法施行令（1965年政令第97号）第96条第1項第3号イからホまでに掲げる事由又は同項第4号に規定する事由が生じている貸出金であります。	
また、延滞債権とは、未収利息不計上貸出金であって、破綻先債権及び債務者の経営再建又は支援を図ることを目的として利息の支払を猶予した貸出金以外の貸出金であります。	
3. 貸出金のうち3か月以上延滞債権額は次のとおりであります。	
3か月以上延滞債権額	－百万円
なお、3か月以上延滞債権とは、元本又は利息の支払が、約定支払日の翌日から3か月以上遅延している貸出金で破綻先債権及び延滞債権に該当しないものであります。	
4. 貸出金のうち貸出条件緩和債権額は次のとおりであります。	
貸出条件緩和債権額	4,305百万円
なお、貸出条件緩和債権とは、債務者の経営再建又は支援を図ることを目的として、金利の減免、利息の支払猶予、元本の返済猶予、債権放棄その他の債務者に有利となる取決めを行った貸出金で破綻先債権、延滞債権及び3か月以上延滞債権に該当しないものであります。	
5. 破綻先債権額、延滞債権額、3か月以上延滞債権額及び貸出条件緩和債権額の合計額は次のとおりであります。	
合計額	36,351百万円
なお、上記2. から5. に掲げた債権額は、貸倒引当金控除前の金額であります。	
6. 手形割引は、「銀行業における金融商品会計基準適用に関する会計上及び監査上の取扱い」（日本公認会計士協会業種別監査委員会報告第24号 2002年2月13日）に基づき金融取引として処理しております。これにより受け入れた商業手形及び買入外国為替等は、売却又は（再）担保という方法で自由に処分できる権利を有しておりますが、その額面金額は次のとおりであります。	11,573百万円
7. 担保に供している資産は次のとおりであります。	
担保に供している資産	
現金預け金	8百万円
有価証券	103,273百万円
その他資産	1百万円
計	103,282百万円

担保資産に対応する債務	
預金	1,560百万円
コールマネー及び売渡手形	43,500百万円
借入金	1,700百万円
上記のほか、為替決済、共同システム及び金融派生商品取引等の担保として、次のものを差し入れております。	
有価証券	2,276百万円
また、その他資産には、金融商品等差入担保金及び敷金保証金が含まれておりますが、その金額は次のとおりであります。	
金融商品等差入担保金	20,000百万円
敷金保証金	654百万円
8. 当座貸越契約及び貸付金に係るコミットメントライン契約は、顧客からの融資実行の申し出を受けた場合に、契約上規定された条件について違反がない限り、一定の限度額まで資金を貸付けることを約する契約であります。これらの契約に係る融資未実行残高は次のとおりであります。	
融資未実行残高	310,827百万円
うち原契約期間が1年以内のもの	310,827百万円
（又は任意の時期に無条件で取消可能なもの）	
なお、これらの契約の多くは、融資実行されずに終了するものであるため、融資未実行残高そのものが必ずしも連結子会社の将来のキャッシュ・フローに影響を与えるものではありません。これらの契約の多くには、金融情勢の変化、債権の保全及びその他相当の事由があるときは、連結子会社が実行申し込みを受けた融資の拒絶又は契約極度額の減額をすることができ旨の条項が付けられております。また、契約時において必要に応じて不動産・有価証券等の担保を徴するほか、契約後も定期的に予め定めている社内手続に基づき顧客の業況等を把握し、必要に応じて契約の見直し、与信保全上の措置等を講じております。	
9. 土地の再評価に関する法律（1998年3月31日公布法律第34号）に基づき、株式会社さらやか銀行の事業用の土地の再評価を行い、評価差額については、当該評価差額に係る税金相当額を「再評価に係る繰延税金負債」として負債の部に計上し、これを控除した金額を「土地再評価差額金」として純資産の部に計上しております。	
再評価を行った年月日	1999年3月31日
同法律第3条第3項に定める再評価の方法	
土地の再評価に関する法律施行令（1998年3月31日公布政令第119号）第2条第1号に定める地価公示法の規定により公示された価格、第2条第3号に定める土地課税台帳及び第4号に定める地価税の課税価格の計算の基礎となる土地の価額を算定するために国税庁長官が定めた公表した方法に基づいて、奥行価格補正、側方路線影響加算等合理的な調整を行って算出。	
同法律第10条に定める再評価を行った事業用の土地の期末における時価の合計額と当該事業用の土地の再評価後の帳簿価額の合計額との差額	4,719百万円
10. 有形固定資産の減価償却累計額	
減価償却累計額	26,935百万円
11. 有形固定資産の圧縮記帳額	
圧縮記帳額	1,643百万円
（当該連結会計年度の圧縮記帳額）	（－百万円）
12. 「有価証券」中の社債のうち、有価証券の私券（金融商品取引法第2条第3項）による社債に対する保証債務の額	10,869百万円

連結損益計算書関係

1. その他の経常収益には、次のものを含んでおります。	
株式等売却益	2,465百万円
2. 営業経費には、次のものを含んでおります。	
給料・手当	10,047百万円
3. その他の経常費用には、次のものを含んでおります。	
貸出金償却	492百万円
株式等売却損	1,167百万円
株式等償却	310百万円
4. 減損損失	
当連結会計年度において、当社グループが保有する以下の資産について、営業キャッシュ・フローの低下、使用範囲または方法の変更、地価の下落等に伴い投資額の回収が見込めなくなったことから、減損損失を計上しております。	
資産のグルーピングは、営業用店舗については、それぞれを収益管理上の区分ごとにグルーピングし、最小単位としております。また、遊休資産及び使用中予定資産並びに処分予定資産は、各資産を最小単位としております。本部等については独立したキャッシュ・フローを生み出さないことから共用資産としております。	

なお、当連結会計年度の減損損失の測定に使用した回収可能価額は、正味売却価額と使用価値のいずれか高い方としております。正味売却価額は、主として不動産鑑定評価基準等に基づき、使用価値は、将来キャッシュ・フローを4.29%で割り引いて、算定しております。

(単位：百万円)			
用途	種類	場所	金額
営業用店舗	土地	山形県	15
営業用店舗	土地	秋田県	157
営業用店舗	建物	山形県	29
営業用店舗	その他	山形県	6
店舗外現金自動設備	建物	宮城県	8
店舗外現金自動設備	その他	宮城県	1
遊休	土地	宮城県	7
遊休	土地	山形県	1
遊休	建物	宮城県	38
遊休	建物	山形県	8
遊休	その他	宮城県	2
遊休	その他	山形県	7
遊休	その他	新潟県	1
	合計		285

連結包括利益計算書関係

その他の包括利益に係る組替調整額及び税効果額		
その他有価証券評価差額金		
当期発生額		1,281百万円
組替調整額		△ 1,892百万円
税効果調整前		△ 610百万円
税効果額		161百万円
その他有価証券評価差額金		△ 449百万円
退職給付に係る調整額		
当期発生額		△ 270百万円
組替調整額		439百万円
税効果調整前		168百万円
税効果額		△ 51百万円
退職給付に係る調整額		117百万円
その他の包括利益合計		△ 331百万円

連結株主資本等変動計算書関係

1. 発行済株式の種類及び総数並びに自己株式の種類及び株式数に関する事項 (単位：千株)

	当連結会計年度 期首株式数	当連結会計年度 増加株式数	当連結会計年度 減少株式数	当連結会計年度 期末株式数	摘要
発行済株式					
普通株式	178,867	—	—	178,867	
B種優先株式	130,000	—	—	130,000	
C種優先株式	100,000	—	—	100,000	
D種優先株式	50,000	—	—	50,000	
合計	458,867	—	—	458,867	
自己株式					
普通株式	232	0	36	196	(注)
合計	232	0	36	196	

(注) 1. 当連結会計年度期首及び当連結会計年度末の自己株式（普通株式）には、株式給付信託（BBT）が保有する自社の株式がそれぞれ、223千株、187千株含まれております。

2. 自己株式（普通株式）の増加0千株は、単元未満株式の買取請求による増加であります。

3. 自己株式（普通株式）の減少36千株は、株式給付信託（BBT）に基づく、対象役員5名の退任に伴う給付による減少36千株及び単元未満株式の売渡し請求による減少0千株であります。

2. 新株予約権及び自己新株予約権に関する事項
該当事項はありません。

3. 配当に関する事項

(1) 当連結会計年度中の配当金支払額					
(決議)	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	1株当たり配当額 (円)	基準日	効力発生日
2018年6月26日 定時株主総会	普通株式	447	2.50	2018年3月31日	2018年6月27日
	B種優先株式	9	0.07	2018年3月31日	2018年6月27日
	C種優先株式	127	1.27	2018年3月31日	2018年6月27日
	D種優先株式	3	0.06	2018年3月31日	2018年6月27日
2018年11月13日 取締役会	普通株式	447	2.50	2018年9月30日	2018年12月3日
	B種優先株式	—	0.00	2018年9月30日	2018年12月3日
	C種優先株式	128	1.28	2018年9月30日	2018年12月3日
	D種優先株式	—	0.00	2018年9月30日	2018年12月3日

(注) 1. 2018年6月26日定時株主総会決議による配当金の総額には、「株式給付信託（BBT）」が保有する当社株式に対する配当金0百万円が含まれております。

2. 2018年11月13日取締役会決議による配当金の総額には、「株式給付信託（BBT）」が保有する当社株式に対する配当金0百万円が含まれております。

(2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が当連結会計年度の末日後となるもの

(決議)	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	配当の原資	1株当たり配当額 (円)	基準日	効力発生日
2019年6月25日 定時株主総会	普通株式	447	利益剰余金	2.50	2019年3月31日	2019年6月26日
	B種優先株式	—	利益剰余金	0.00	2019年3月31日	2019年6月26日
	C種優先株式	128	利益剰余金	1.28	2019年3月31日	2019年6月26日
	D種優先株式	—	利益剰余金	0.00	2019年3月31日	2019年6月26日

(注) 2019年6月25日定時株主総会決議による配当金の総額には、「株式給付信託（BBT）」が保有する当社株式に対する配当金0百万円が含まれております。

連結キャッシュ・フロー計算書関係

現金及び現金同等物の期末残高と連結貸借対照表に掲記されている科目の金額との関係	
現金預け金勘定	162,496百万円
定期預け金	△ 1百万円
その他の預け金	△ 2,072百万円
現金及び現金同等物	160,421百万円

リース取引関係

1. ファイナンス・リース取引

- (借手側)
重要性に乏しいので記載は省略しております。
(貸手側)
(1) リース投資資産の内訳

リース料債権部分	9,434
見積残存価額部分	69
受取利息相当額 (△)	936
リース投資資産	8,568

(2) リース債権及びリース投資資産に係るリース料債権部分の金額の連結決算日後の回収予定額

	リース債権	リース投資資産に係るリース料債権部分
1年以内	1,070	2,710
1年超2年以内	808	2,210
2年超3年以内	685	1,749
3年超4年以内	378	1,242
4年超5年以内	249	731
5年超	135	789
合計	3,327	9,434

2. オペレーティング・リース取引

- (借手側)
重要性に乏しいので記載は省略しております。
(貸手側)
オペレーティング・リース取引のうち解約不能のものに係る未経過リース料

1年内	18
1年超	2
合計	20

金融商品関係

1. 金融商品の状況に関する事項

(1) 金融商品に対する取組方針

当社グループは、預金業務、貸出業務等の銀行業務を中心に、リース業務及びクレジットカード業務などの金融サービスに係る事業を行っております。主としてお客様から預金等を受け入れ、貸出金や有価証券等による資金運用を行っております。
また、金利変動等を伴う金融資産及び金融負債を有していることから、金利変動等による不利な影響が生じないように、資産及び負債の総合管理 (ALM) を行っており、その一環として、デリバティブ取引も行っております。

(2) 金融商品の内容及びそのリスク

当社グループが保有する金融資産は、主に国内の法人・個人及び地方公共団体等に対する貸出金であり、貸出先の契約不履行によってもたらされる信用リスクに晒されております。

また、有価証券は、主に株式、債券、投資信託及び組合出資金であり、売買目的、純投資目的及び政策投資目的で保有しております。これらは、それぞれ発行体の信用リスク及び金利リスク、価格変動リスク、為替リスクに晒されております。

社債は、一定の環境の下で市場を利用できなくなる場合など、支払期日にその支払いを実行できなくなる流動性リスクに晒されております。

デリバティブ取引は、主にヘッジを目的として、金利関連取引 (金利スワップ取引) 及び通貨関連取引 (為替予約) を利用しております。これらのデリバティブ取引は、市場の変動により損失を被る市場リスク、取引先の契約不履行により損失を被る信用リスクを内包しております。

(3) 金融商品に係るリスク管理体制

① 信用リスクの管理

当社グループでは、信用リスク管理に関する諸規程・基準に従い、個別案件の与信審査、個別債務者の信用格付、貸出資産の自己査定、事業再生支援への取組み、問題債権の管理など、適切な信用リスクの管理を行っております。
与信ポートフォリオについては、業種集中度や大口集中度等のモニタリングを行い、集中リスクを排除したポートフォリオ構築を図っております。
これらの信用リスク管理は、各営業店のほか与信管理部門により行われ、また、定期的にグループリスク管理委員会等に報告しております。さらに、信用リスク管理の状況については監査担当部門が監査しております。

② 市場リスクの管理

当社グループでは、市場リスク管理に関する諸規程・基準に従い、市場取引執行部門であるフロントオフィス、市場取引事務部門であるバックオフィス、及び市場リスク管理部門であるミドルオフィスの3部門による相互牽制体制とし、市場リスクの評価、モニタリング及びコントロールを行い、適切な市場リスクの管理を行っております。
市場リスク管理部門は、計量可能な市場リスクについて市場リスク量を計測するとともに、市場リスク量を適切にコントロールするため、保有限度枠や損失限度枠等を設定し、遵守状況をモニタリングし、月次でグループリスク管理委員会等に報告しております。

また、ストレス・テストやシミュレーション分析を行い、金利・株・為替市場が大きく変動した場合に、市場リスク量や損益に与える影響等を試算し、グループリスク管理委員会等において、市場リスク量が自己資本の状況に対して許容できる状況に収まっていることを確認しております。

当社グループにおいて、市場リスクの影響をうける主たる金融商品は、「預け金」、「有価証券」、「貸出金」、「預金」、「借入金」、「社債」、「デリバティブ取引」です。

当社グループでは、これら金融資産、金融負債についてVaR (観測期間は1年、保有期間は政策投資以外の上場株式、国債、地方債、社債、投資信託は2ヶ月、外国証券・預金・貸出金・政策投資株式・金利スワップ・その他金利感応性を有する資産・負債は6ヶ月、信頼区間は99%、分散・共分散法) を用いて市場リスク量として、把握・管理しております。

当社グループの市場リスク量は、連結子会社である株式会社きらやか銀行及び株式会社仙台銀行の市場リスク量を合算した値として管理しており、2019年3月31日において、当該リスク量の大きさは6,911百万円になります。

なお、有価証券のVaRについては、市場リスク量の計測モデルの正確性を検証するため、モデルが計測したVaRと実際の損益変動額を比較するバックテストを子銀行毎に実施しており、使用する計測モデルは十分な精度で市場リスクを捕捉しているものと考えております。

ただし、VaRは過去の相場変動をベースに統計的に算出した一定の発生確率での市場リスク量を算出しているため、通常では考えられないほど市場環境が激変する状況下におけるリスクは捕捉できない場合があります。

③ 資金調達に係る流動性リスクの管理

当社グループでは、流動性リスク管理に関する諸規程・基準に従い、流動性リスク管理部門が、マーケット環境の把握、資金の運用調達状況の分析等により、日々の適切な資金繰り管理を実施しております。

短期間で資金化できる資産を流動性準備として一定水準以上保有することなど日々資金繰り管理や資金調達の状況を監視し、その監視状況をグループリスク管理委員会等に報告する体制としております。

(4) 金融商品の時価等に関する事項についての補足説明

金融商品の時価には、市場価格に基づく価額のほか、市場価格がない場合には合理的に算定された価額が含まれております。当該価額の算定においては一定の前提条件等を採用しているため、異なる前提条件等によつた場合、当該価額が異なることもあります。

2. 金融商品の時価等に関する事項

連結貸借対照表計上額、時価及びこれらの差額は、次のとおりであります。なお、時価を把握することが極めて困難と認められる非上場株式等は、次表には含めておりません (注2) 参照。

	連結貸借対照表計上額	時価	差額
(1) 現金預け金	162,496	162,496	—
(2) 有価証券			
満期保有目的の債券	—	—	—
その他有価証券	500,991	500,991	—
(3) 貸出金	1,762,749		
貸倒引当金 (※1)	△ 9,405		
	1,753,344	1,761,522	8,178
資産計	2,416,832	2,425,010	8,178
(1) 預金	2,163,781	2,163,774	△ 7
(2) 譲渡性預金	153,033	152,994	△ 39
(3) コールマネー及び売渡手形	43,500	43,500	—
負債計	2,360,315	2,360,268	△ 46

(※1) 貸出金に対応する一般貸倒引当金及び個別貸倒引当金を控除しております。
(※2) 連結貸借対照表計上額の重要性が乏しい科目については、記載を省略しております。

(注1) 金融商品の時価の算定方法

資産

(1) 現金預け金

満期のない預け金については、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。満期のある預け金についても、約定期間が短期間 (1年以内) であり、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。

(2) 有価証券

株式は取引所の価格、債券は取引所の価格又は取引金融機関及び情報ベンダーから提示された価格を時価としております。投資信託は、公表されている基準価格及び取引金融機関等から提示された価格を時価としております。

自行保証付私算債は実質貸出金と同様とみなせるため、内部格付及び期間に基づく区分ごとに元金金の合計額を同様の新規発行を行った場合に想定される利率で割り引いて時価を算定しております。

(3) 貸出金

貸出金のうち、変動金利によるものは、短期間で市場金利を反映するため、貸出先の信用状態が実行後大きく異ならない限り、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。

固定金利によるものは、貸出金の種類及び内部格付、期間に基づく区分ごとに、元金金の合計額を同様の新規貸出を行った場合に想定される利率で割り引いて時価を算定しております。なお、約定期間が短期間 (1年以内) のものは、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。

デリバティブの要素が含まれている貸出金及び住宅ローン債権は、取引金融機関及び情報ベンダーから提示された価格を時価としております。

また、破綻先、実質破綻先及び破綻懸念先に対する債権等については、見積将来キャッシュ・フロー又は担保及び保証による回収可能見込額等に基づいて貸倒見積高を算定しているため、時価は連結決算日における連結貸借対照表上の債権等計上額から貸倒引当金計上額を控除した金額に近似しており、当該価額を時価としております。

貸出金のうち、当該貸出を担保資産の範囲内に限るなどの特性により、返済期限を設けていないものについては、返済見込み期間及び金利条件等から、時価は帳簿価額に近似しているものと想定されるため、帳簿価額を時価としております。

負債

(1) 預金、及び(2) 譲渡性預金

要求払預金については、連結決算日に要求された場合の支払額 (帳簿価額) を時価とみなしております。

また、定期預金、定期積金及び譲渡性預金の時価は、一定の期間ごとに区分して将来のキャッシュ・フローを割り引いて現在価値を算定しております。その割引率は、新規に預金を受け入れた際に使用する利率を用いております。

(3) コールマネー及び売渡手形

約定期間が短期間 (2週間以内) であり、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。

(注2) 時価を把握することが極めて困難と認められる金融商品の連結貸借対照表計上額は次のとおりであり、金融商品の時価情報の「資産(2) その他有価証券」には含まれておりません。

	(単位: 百万円)
非上場株式 (※1) (※2)	2,063
組合出資金 (※3)	642
合計	2,705

(※1) 非上場株式については、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから時価開示の対象とはしていません。

(※2) 当連結会計年度において、非上場株式について99百万円減損処理を行っております。

(※3) 組合出資金のうち、組合財産が非上場株式など時価を把握することが極めて困難と認められるもので構成されているものについては、時価開示の対象とはしていません。

(注3) 金銭債権及び満期のある有価証券の連結決算日後の償還予定額

	1年以内	1年超 3年以内	3年超 5年以内	5年超 7年以内	7年超 10年以内	10年超
預け金	128,910	—	—	—	—	—
有価証券	97,894	160,853	100,518	34,554	37,935	41,542
満期保有目的の債券	—	—	—	—	—	—
うち国債	—	—	—	—	—	—
地方債	—	—	—	—	—	—
社債	—	—	—	—	—	—
その他	—	—	—	—	—	—
その他有価証券のうち満期があるもの	97,894	160,853	100,518	34,554	37,935	41,542
うち国債	28,500	49,800	11,000	—	700	17,000
地方債	27,302	27,031	27,686	1,613	1,400	1,675
社債	31,378	55,148	40,747	2,245	1,700	22,367
その他	10,713	28,873	21,084	30,696	34,134	500
貸出金	445,059	290,123	229,037	155,177	188,003	455,347
合計	671,864	450,977	329,556	189,732	225,939	496,889

(注4) 預金、譲渡性預金及びその他の有利子負債の連結決算日後の返済予定額

	1年以内	1年超 3年以内	3年超 5年以内	5年超 7年以内	7年超 10年以内	10年超
預金(※)	2,033,632	111,030	19,119	0	—	—
譲渡性預金	153,033	—	—	—	—	—
コール・オフ・バランス	43,500	—	—	—	—	—
合計	2,230,166	111,030	19,119	0	—	—

(※) 預金のうち、要求払預金については、「1年以内」に含めて開示しております。

退職給付関係

1. 採用している退職給付制度の概要

株式会社きらやか銀行は、確定給付型の制度として、企業年金基金制度及び退職一時金制度(当該制度は退職給付信託を設立しております。)を設けております。なお、2007年10月1日に、植産銀行厚生年金基金と山形しあわせ銀行企業年金基金を統合し、新規にきらやか銀行企業年金基金を設立しております。

また、2014年1月1日に、退職給付制度の一部について確定拠出年金制度への移行及び給付利率が市場金利に適用して変動するキャッシュバランス類似型の導入等を行いました。

株式会社仙台銀行は、確定給付型の制度として、確定給付企業年金制度を設けております。本制度は、2010年4月1日付で適格退職年金制度から移行しております。

また、2014年3月25日に、退職給付制度の一部について確定拠出年金制度への移行及び退職給付に付与する利息部分が市場金利に適用して変動するキャッシュバランスプランの導入等を行いました。

なお、従業員の退職等に際して割増退職金を支払う場合があります。一部の連結子会社は、退職一時金制度を設けており、簡便法により退職給付に係る負債及び退職給付費用を計算しております。

2. 確定給付制度

(1) 退職給付債務の期首残高と期末残高の調整表

退職給付債務の期首残高	14,813
勤務費用	516
利息費用	21
数理計算上の差異の発生額	188
退職給付の支払額	△ 1,164
過去勤務費用の発生額	△ 11
退職給付債務の期末残高	14,363

(2) 年金資産の期首残高と期末残高の調整表

年金資産の期首残高	16,909
期待運用収益	404
数理計算上の差異の発生額	△ 93
事業主からの拠出額	703
退職給付の支払額	△ 938
年金資産の期末残高	16,984

(3) 退職給付債務及び年金資産の期末残高と連結貸借対照表に計上された退職給付に係る負債及び退職給付に係る資産の調整表

積立型制度の退職給付債務	14,280
年金資産	△ 16,984
	△ 2,704
非積立型制度の退職給付債務	83
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	△ 2,620

退職給付に係る負債	83
退職給付に係る資産	△ 2,704
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	△ 2,620

(4) 退職給付費用及びその内訳項目の金額

勤務費用	516
利息費用	21
期待運用収益	△ 404
数理計算上の差異の費用処理額	500
過去勤務費用の費用処理額	△ 60
臨時に支払った割増退職金	17
確定給付制度に係る退職給付費用	590

(5) 退職給付に係る調整額

退職給付に係る調整額に計上した項目(税効果控除前)の内訳は次のとおりであります。

過去勤務費用	△ 49
数理計算上の差異	217
合計	168

(6) 退職給付に係る調整累計額

退職給付に係る調整累計額に計上した項目(税効果控除前)の内訳は次のとおりであります。

未認識過去勤務費用	331
未認識数理計算上の差異	△ 1,363
合計	△ 1,031

(7) 年金資産に関する事項

① 年金資産合計に対する主な分類ごとの比率は、次のとおりであります。

債券	54%
生命保険一般勘定	22%
株式	20%
その他	4%
合計	100%

(注) 年金資産合計には、退職一時金制度に対して設定した退職給付信託が、11%含まれております。

② 長期期待運用収益率の設定方法

年金資産の長期期待運用収益率を決定するため、現在及び予想される年金資産の配分と、年金資産を構成する多様な資産から現在及び将来期待される長期の収益率を考慮しております。

(8) 数理計算上の計算基礎に関する事項

主要な数理計算上の計算基礎

割引率	0.05%又は0.51%
長期期待運用収益率	2.00%又は2.50%

3. 確定拠出制度

当社グループの確定拠出制度への要拠出額は157百万円であります。

ストック・オプション等関係

該当事項はありません。

税効果会計関係

1. 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生主な原因別の内訳

繰延税金資産	
貸倒引当金	3,518百万円
税務上の繰越欠損金(注1)	3,682百万円
時価評価による簿価修正額	476百万円
退職給付に係る負債	487百万円
有価証券償却否認額	679百万円
減損損失及び減価償却費の償却超過額	344百万円
その他有価証券評価差額金	372百万円
その他	1,076百万円
繰延税金資産小計	10,637百万円
税務上の繰越欠損金に係る評価性引当額(注1)	△ 1,904百万円
将来減算一時差異等の合計に係る評価性引当額	△ 3,645百万円
評価性引当額小計	△ 5,550百万円
繰延税金資産合計	5,087百万円
繰延税金負債	
その他有価証券評価差額金	△ 655百万円
資産除去費用の資産計上額	△ 12百万円
退職給付に係る資産	△ 608百万円
時価評価による簿価修正額	△ 716百万円
繰延税金負債合計	△ 1,994百万円
繰延税金資産(負債)の純額	3,093百万円

(注1) 税務上の繰越欠損金及びその繰延税金資産の繰越期限別の金額

	1年以内	1年超 2年以内	2年超 3年以内	3年超 4年以内	4年超 5年以内	5年超	合計
税務上の繰越欠損金(※1)	—	286	1,355	404	296	1,338	3,682
評価性引当額	—	△221	△829	△14	—	△838	△1,904
繰延税金資産	—	65	526	390	296	500	(※2) 1,778

(※1) 税務上の繰越欠損金は、法定実効税率を乗じた額であります。

(※2) 税務上の繰越欠損金に係る繰延税金資産は、将来の課税所得が見込まれることから、その一部を回収可能と判断しております。

2. 連結財務諸表提出会社の法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主な項目別の内訳

法定実効税率	30.58%
(調整)	
交際費等永久に損金に算入されない項目	1.51%
受取配当金等永久に益金に算入されない項目	△ 1.03%
住民税均等割等	2.35%
評価性引当額の増減	△ 4.93%
土地再評価差額金取崩	△ 2.04%
その他	0.00%
税効果会計適用後の法人税等の負担率	26.43%

表示方法の変更

(「税効果会計に係る会計基準」の一部改正)の適用に伴う変更)

「税効果会計に係る会計基準」の一部改正(企業会計基準第28号 2018年2月16日。以下「税効果会計基準一部改正」という。)を当連結会計年度から適用し、税効果関係注記を変更しております。

税効果関係注記において、税効果会計基準一部改正第3項から第5項に定める「税効果会計に係る会計基準」注解(注8)(評価性引当額の合計額を除く。)及び同注解(注9)に記載された内容を追加しております。

連結財務諸表

Jimoto Holdings

資産除去債務関係

資産除去債務のうち連結貸借対照表に計上しているもの

- 当該資産除去債務の概要
営業店舗及び営業店舗用土地の不動産賃貸借契約に伴う原状回復義務等であります。
- 当該資産除去債務の金額の算定方法
物件ごとに使用見込期間を取得から15～50年と見積もり、割引率は使用見込期間に応じて0.01～2.30%を使用して資産除去債務の金額を計算しております。
- 当該資産除去債務の総額の増減

期首残高	119百万円
有形固定資産の取得に伴う増加額	－百万円
時の経過による調整額	1百万円
資産除去債務の履行による減少額	－百万円
期末残高	120百万円

重要な後発事象

該当事項はありません。

1株当たり情報

1株当たり純資産額	309円19銭
1株当たり当期純利益	7円68銭
潜在株式調整後1株当たり当期純利益	2円90銭

(注) 1. 1株当たり純資産額の算定上の基礎は次のとおりであります。

純資産の部の合計額 (百万円)	115,732
純資産の部の合計額から控除する金額 (百万円)	60,488
うち非支配株主持分 (百万円)	360
うち優先株式発行金額 (百万円)	60,000
うち定時株主総会決議による優先配当額 (百万円)	128
普通株式に係る期末の純資産額 (百万円)	55,244
1株当たり純資産額の算定に用いられた 期末の普通株式の数 (千株)	178,671

(※) 株主資本において自己株式として計上されている信託に残存する当社の株式は、1株当たり純資産額の算定上、期末株式数の計算において控除する自己株式に含めております。
当連結会計年度 187千株

- 1株当たり当期純利益及び潜在株式調整後1株当たり当期純利益の算定上の基礎は、次のとおりであります。

1株当たり当期純利益	
親会社株主に帰属する当期純利益 (百万円)	1,630
普通株主に帰属しない金額 (百万円)	257
うち定時株主総会決議による優先配当額 (百万円)	128
うち中間優先配当額 (百万円)	128
普通株式に係る親会社株主に帰属する当期純利益 (百万円)	1,373
普通株式の期中平均株式数 (千株)	178,657
潜在株式調整後1株当たり当期純利益	
親会社株主に帰属する当期純利益調整額 (百万円)	257
うち定時株主総会決議による優先配当額 (百万円)	128
うち中間優先配当額 (百万円)	128
普通株式増加数 (千株)	381,739
うち優先株式 (千株)	381,739
うち新株予約権付社債 (千株)	—
希薄化効果を有しないため、潜在株式調整後1株当たり当期純利益の算定に含めなかった潜在株式の概要	—

(※) 株主資本において自己株式として計上されている信託に残存する当社の株式は、1株当たり当期純利益及び潜在株式調整後1株当たり当期純利益の算定上、期中平均株式数の計算において控除する自己株式に含めております。
当連結会計年度 201千株